

SY2-2

ワクチン忌避をもつ保護者へのアプローチ —「動機づけインタビュー」を用いて—

齋藤 昭彦

新潟大学大学院医歯学総合研究科小児科学分野

ワクチン忌避とは、接種可能なワクチンがあるにも関わらず、ワクチン接種を躊躇したり、拒否することを指す。ワクチン忌避は世界のほとんどの国で報告されているが、特に近年のインターネット、Social Network System (SNS) の普及によって、ワクチンの情報が様々な形で提供、普及、拡散されている。更に、コロナウイルス感染症 2019 (COVID-19) に対するワクチン接種をきっかけに顕在化している。

この問題に対して、日本小児科学会は 2021 年から対策を検討してきたが、今回、Motivational Interview (動機づけインタビュー) を用いて、これにアプローチし、解決するプロジェクトを立ち上げ、活動を開始し、2023 年 1 月に最初のセミナーを東京で開催した。

ワクチン忌避がある保護者へのアプローチとして、まず最初に Presumptive Approach (当たり前のこととして話す) を行う。これは、今日接種予定のワクチンは予定されているもの、当たり前のもので保護者の方にアプローチする方法で、保護者はそれを通常のケアと認識し、接種に同意する。それが困難な場合、Motivational Interview (動機づけインタビュー) を行う。このインタビューを行う上で、最も大事なポイントは、常に相手に寄り添いながら会話を進めることである。また、インタビューのアプローチは、「OARS」Open-ended question (自由回答式の質問)、Affirmation (賛同)、Reflection (反映)、Summarize (まとめる) の順番でインタビューを進める。この流れを模擬患者 (今回は俳優が演じたビデオクリップ) を通し、ワクチン忌避をもつ保護者の方々への動機づけインタビューを用いてアプローチすることを学ぶ。

今回は、小児科医を対象としたが、今後は、このセミナーを小児科医だけではなく、ワクチン接種の機会があり、ワクチン忌避を持つ患者と接触の可能性のある医療関係者に広げられるよう、様々な機会にこのセミナーを開催していきたいと考えている。